

なら歴史芸術文化村
滞在アーティスト誘致交流事業
文化村AIR
ドキュメント2024

Nara Prefecture
Historical and Artistic Culture Complex
Artist In Residence
Documents 2024

Artist In Residence Documents 2024 Nara Prefecture Historical and Artistic Culture Complex



なら歴史芸術文化村

綿々とはたづみ
大槻唯我

ごあいさつ

芸術文化(アート)に触れ、芸術文化(アート)でつながる。

令和4年度から始まったなら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業「文化村AIR」は、本年度で3年目となりましたが、今回も全国から多数のご応募をいただきました。奈良や当施設に魅力を感じてくださるアーティストの方々が多くいることを喜ぶとともに感謝しております。

「奈良の豊かな歴史・芸術文化を探求し、地域との交流を深めながら、新しい視点と切り口で表現する」ことをテーマに募集したところ、多様な視点やジャンルの方々からの応募があり、この事業の対象となるアーティストの裾野が広がったと感じております。

本年度は新たに、滞在制作の事前準備として、天理市及び桜井市の両地域での宿泊滞在と地域内の案内をスケジュールに組み込みました。これにより各地域の自然・歴史・慣習などを十分に理解することが、地域の特性を活かした制作活動に結びついたのではないかと考えています。

招聘されたアーティスト・写真家の大槻唯我氏は、事前準備期間だけでなく滞在期間中も地域の探索を活発に行うとともに、地域の小学校に

出向いてのワークショップなど地域住民の方々との交流も積極的に行いました。

また、本事業初の試みとして、大槻氏からの提案で美術系大学志望の高校生との意見交換会を実施しました。芸術の世界に興味を持つ若い方の進路選択の一助となればという大槻氏の思いから実現したのですが、これからも何らかの形で、このような芸術活動を目指す次世代の支援につながる取り組みを継続して実施できればと思います。

本事業は引き続き、実行委員会構成メンバーである天理大学、天理市、桜井市となら歴史芸術文化村が連携して、奈良県民をはじめ多くの方々から芸術文化への関心を高め、芸術文化で人や地域がつながる活動を進めてまいります。

なら歴史芸術文化村

滞在アーティスト誘致交流事業 実行委員会

〈目次〉

なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業「文化村AIR」2024 事業概要 …………… 4

風景と地図——大槻唯我の視覚 | 佐藤守弘 …………… 7

成果展記録 綿々とはたづみ | 大槻唯我 …………… 12

ART-Space TARN 展示記録 …………… 15

なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3Fスタジオ302 展示記録 …………… 33

公私混濁 ——まぜるな危険? —— | 黒岩康博 …………… 51

滞在記録 …………… 62

審査委員による展覧会講評 …………… 71

募集要項 …………… 75

アーティストプロフィール …………… 78

なら歴史芸術文化村について …………… 79

なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業「文化村AIR」

2024事業概要

なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業「文化村AIR」(以下、「文化村AIR」)は全国からアーティストを公募・選定し、一定期間文化村で滞在・リサーチ・制作・作品発表を行うアーティスト・イン・レジデンス事業です。なら歴史芸術文化村が位置する天理市は、平成30年度よりアーティストを誘致し、市民がアートに触れる機会を創出するなど「芸術文化に出会える街」として事業を行ってきました。なら歴史芸術文化村は令和4年度の開村を機に天理市の事業を継承・発展し、アートと社会をつなぐプラットフォームになることを目指し、「文化村AIR」を始動させました。

令和6年度の「文化村AIR」は15組の応募の中から大槻唯我氏が選ばれました。大槻氏は、被写体となる土地の詳細なリサーチ、フィールドワークに基づいた写真制作を行っています。今回は、山^{やま}辺の道周辺や山間部に至る道などをひたすら歩き、写真作品を制作しました。それはシンプルながらも「場所を撮る」「死から生を捉え直す」という自身のコンセプトに基づく活動でした。日を追うごとにスタジオの壁を埋め尽くしてい

く制作過程としての写真、メモやテキスト、地図のトレースなどによって、滞在中に大槻氏が感じ得た情報の蓄積が可視化されていきました。

成果発表展は、文化村内スタジオとArt-Space TARNの2会場で開催しました。スタジオでは滞在中の制作プロセスを可視化し、TARNでは写真作品18点を展示しました。

大槻唯我「綿々とはたづみ」

《滞在期間》

2024年10月1日～11月30日

《成果発表展》

2024年11月16日～11月27日

- 会場1:なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3F スタジオ302
- 会場2:Art-Space TARN

《事業にご協力いただいた皆様》(50音順)

桜井市観光ボランティアガイドの会

桜井市立初瀬小学校

天理市山の辺の道ボランティアガイドの会

奈良県立橿原考古学研究所

奈良県立桜井高等学校

《主催》

なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会

(なら歴史芸術文化村・天理大学・天理市・桜井市)

「なら歴史芸術文化村」のWEBサイトにて
本事業の記録動画を公開しています。>



風景と地図——大槻唯我の視覚

佐藤守弘

大槻唯我の写し取る風景の基層には、撮影者の移動がある。そのことがありありと感じ取れるのが、天理本通り商店街の中程にあるArt-Space TARNでの展示「綿々とはたづみ」であった。入って右側の壁面に、観者の眼の高さに下揃えで一直線に並べられた作品は、その額縁を接することで連続的になり、大槻が歩きながら見た風景を追体験できるかのようなようである^{〔図1〕}。

TARNのある天理本通りは、近代に天理教本部への参道として発展してきた商店街であるが、その昔は、石上神宮^{いそのかみ}への参道でもあり、山辺の道につづく道である。このように道には多層的に歴史が堆積している。その究極のかたち、大槻がそぞろ歩き、目にした風景をカメラで切り取った山辺の道であろう。周知の通り、山辺の道は日本最古の道とも言われるほどの歴史を持つ街道であり、行き交ってきたさまざまな人びとがそれぞれの生の痕跡を刻み込んできた場所である。研究者ならばそのレイヤーを剥がして、それぞれを検証していこうだが、アーティストならさらに層を重ねるだろう。大槻もその道を歩くことで、そこに自身がそこで彼女が生きた痕跡を上書きしたのかもしれない。

さてここで、右壁面に展示された写真のうち、左から2点目の写真を見てみよう^{〔図2〕}。人気のない殺風景な道が画面奥へと続いている。なにか工事が行われているのだろうか、仮設のロープが両脇に張られている。取り立てて目を奪うものがない、なんの変哲もない風景である。その写真の主題は、ただ「道」であるという他ない。地平線が画面のほぼ中央を通っているので、これが大槻がまっすぐ水平に前を見た視点であることが分かる。先述の通り、この写真は平均的な観者の目の高さに設えられているので、映画の主観ショットによって観者が主人公に同一化するような具合で、観者は大槻の目を借りて、この道を歩くかのような感覚を得るだろう。

美術史学者の辻成史は、近年の風景論で「身体の動き」が重要視されていることに注目し、「ホドロロジー」(hodology)という概念を提示する。ホドロロジーとは、ギリシア語の「ホドス(道)とロゴス」を結びつけた造語で「活きられ・体験される空間」を記述し解釈するための作業概念であるという。その概念を導入することで可能になるのは、「体験者／記述者の「移動」の重視」である。すなわち、語り手の「移動」が風景の成

立の基本にあるという。移動に注目することで風景を、客観的な「数学的空間」すなわち「それ自体としては時間的な変化を免れた、均質で永遠不易な空間」として扱うのではなく、主観的で「時間とともに絶えず変化する不連続の空間」として見るのである¹。

さらに上で論じた道の写真は、田畑越しの墓と住宅地の写真と祭の行列の写真にはさまれることによって、そのふたつの風景をつなぐ役割も果たす。右壁面の写真群は、そのような道の写真をところどころにはさむことによって、シークエンシャルな感覚を誘い出す。忘れてはいけないのは、観者は、その写真群を見るために平行移動しなければいけないという点である。その感覚は、パノラマを体験するのにも似た「移動性を持った仮想的な視覚²」を生み出すだろう。そこで観者もまた、大槻の経験した風景をもう一度「生きる」ことになる。

†††

一方、なら歴史芸術文化村で大槻が滞在制作を行っていたスタジオ

を利用して行われた展示においては、TARNで提示された風景を作り出す際に参照した文献資料、移動を記録した地図、日々の取材メモ、そして撮影した写真を小さめにプリントしたものが、壁一面に所狭しと掲示されていた——靴底に入り込んだ小石までも。小さな写真群は、いわば日本画などで言う「本画」に対する「下絵」に当たるもので、従来の美術の文脈だと「作品未満」とされてきたイメージである——西洋でも"painting"と"drawing"は峻別される。さらに地図やメモに至っては、「美術作品」を管理する学芸部門ではなく、研究・教育部門にあるアーカイヴズ部門で統轄している美術館も多い³。しかしながらマルセル・デュシャン (Marcel Duchamp) の《グリーン・ボックス》(1934)を嚆矢としたアーカイヴ的なアート (Archival Art) は、西洋近代における芸術概念を下支えしてきた「作品」概念へ疑問を突きつけた。

スタジオにおける大槻の展示は、TARNの展示を補足するような資料展示として見られる可能性もあり、それも間違いではない。しかし、その展示が見せる統一性は、それがひとつのインスタレーションとして、TARNの写真展示と対等の立場で相互補完するような存在であるよう

に感じさせる。すなわちアーカイヴァル・アートの展示として見ることもできるのだ。

特に私の興味をそそったのは、大槻がリサーチに使用した国土地理院の地図である。それにはトレーシング・ペーパーが重ねられ、彼女が踏破した道が堅固な、迷いのない線で辿られている⁴。TARNに並べられた写真が、大槻の見た主観的な風景を再現しているとするならば、その地図に引かれた線は、制作者の身体の動きの痕跡を事後的に確認したものと考えられる——それを「数学的空間」に打ち込まれたくさびと見てもいい。山辺の道を歩いた大槻の経験は、写真によって記録される一方で、地図によってその都度確認されることで次の移動につながっていたのかもしれない。

歴史家／哲学者のミシェル・ド・セルトー (Michel de Certeau) は、人が場所を叙述する時に、「地図」型と「順路」型の二類型があると指摘した。「地図」的叙述とは、「見る(場所の秩序の認識)」ことであり、「図であらわす」語り方、すなわち「ディスクール〔話〕による操作の系列化」である。一方、「順路」的叙述とは、「行く(空間をうみだす行為)」こ

とであり、「動きを組織する」語り方、すなわち「観察による全体的平面図化」であると述べる⁴。大槻における写真と地図が、それぞれ「順路」と「地図」に当たることは明らかだろう。風景の背景に地図が存在することで、山辺の道が立体的に描かれることになるのである。

大槻は、展示会場に置かれたテキストで、歩くことと読むことをつなげているが、セルトーもまた「読むこと」に並々ならぬ関心を寄せている——彼は作ることでなく使うこと、計画することではなく歩くこと、書くことではなく読むことに、つねに身を寄せる。セルトーにとって、読むことは、作者の意図を超えた読者による創造行為である。読むことで読者は、「気づかれざるものを創造する⁵」。大槻にとっても、道は歩く対象であり、読む対象である。そしてその読みは、歴史の堆積にあらたな層——「気づかれざるもの」——を付け加えるのであろう。地図に重ねられたトレーシング・ペーパーのように。



【図1】



【図2】



【図3】

- 1 辻成史「序論」、同編『はるかなる「時」のかなたに——風景論の新たな試み』、三元社、2023年、10-11ページ。および拙稿「「移動」と「時間性」で風景を読み替える」、『図書新聞』3619号、2023年12月16日付、6面も参照のこと。
- 2 映画研究者アン・フリードバーグ (Anne Friedberg) は、19世紀のヨーロッパに登場した、パサージュやパノラマ、美術館や百貨店、そして映画といった視覚装置に共通する特徴を「移動性を持った仮想的な視覚」とした。『ウィンドウ・ショッピング——映画とポストモダン』(井原慶一郎ほか訳、松柏社、2008年)を参照のこと。
- 3 ウェブサイト *AMeeT* に掲載された私の報告「ミュージアムとアーカイブズ——ニューヨーク近代美術館をモデル・ケースに」(『みずのき美術館の学習会～福祉施設の作品をアーカイブするには: トーク第2部: 価値と活用という視点で見るアーカイブ』<https://www.ameet.jp/digital-archives/1048/#page2>, 2017年5月)を参照のこと。
- 4 ミシェル・ド・セルトー『日常の実践のポイエティーク』山田登世子訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、2021、1987年、287-289ページ。
- 5 同、389ページ。

佐藤守弘

視覚文化研究者／同志社大学文学部美学芸術学科教授。博士(芸術学)。写真を中心とした視覚メディアの歴史や理論を近現代日本を主なフィールドとして研究。著書に『トポグラフィの日本近代——江戸泥絵・横浜写真・芸術写真』(青弓社、2011年)、最近の論文に「写真×絵画／工芸／映画——複合メディアとしての彩色／色彩写真」(『美術フォーラム21』47、2023年6月)、「眼視の力——コミュニケーションとしての商品展示」(『文化学年報』73、2024年3月)など。

綿々とはたづみ 大槻唯我

小高いところから見下ろせば視界に収まってしまいそうなほどに狭く、古代からの多様な生活が深く降り積もる奈良盆地の「場所」、「営みの在処」を知りたいというところから、今回の滞在制作がはじまった。平群^{へぐり}に親戚が住んでいるから、毎年のように奈良県には訪れてはいたし、学部の卒業制作のために纏向^{まきむく}周辺で撮影をしたこともあった。しかし、観光名所を訪れる程度で、特定の点としての奈良しか知らないままだった。なぜこの土地に多くの古墳が造られたのか、大和政権がなぜこの地に誕生したのか、都が京都に移ってから、奈良はどのようにして今に至ったのか、人々はこういった暮らしを経てきたのか何も分からないまま、知りたいと、ずっと気にかかっていた。山辺の道を歩くことから^{かみ}はじまり、上^{しも}ツ道、下ツ道にも足を延ばした。そのうちに、一見長閑な田舎の風景に息づく、人の存在の密度が気

にかかるといった。都市部の、同時代に生きる無数の人間の存在感とは少し違うが、東京にも匹敵するくらいの存在の濃さ、現存する人口だけではなく古代からずっと沈殿してきた存在の密度があまりに高く、閑かな圧力を感じていた。そうして、官道や遊山に使われる道だけではなく、庶民がより日常的に使っていたであろう、山間部と平野部を繋ぐ道へも興味が湧いた。大した標高差はないのだが、平野部と比べると格段に自然の気配が増す。土も、森も、川の匂いも遥かに濃くなり、人間だけではない生き物の存在を近くに感じる。私にはこういった土地の方が落ち着くのだろうかと思いつつ、狭い谷間の集落にかけられた勧請縄をくぐり、ひとり山の間道を歩いた。ほんの数十年前まで、みな自分の足で何十キロもの移動をしていたことを考えると、どこまでも行けるような気になる。

この地域は、どこを写真に撮っても、異なる時代が混在して写り込んでくる。古代と現代、中世と近世、あるいは中世と現代、そういった様々な時代の層が、大きな露頭のように混ざり合い、時に牽制し合いながらそこかしこに現れ出ている。奈良には確かに歴史があるけれど、歴史という時に焦点の当たる大きな出来事から零れ落ちてしまうもの、些細な日常生活や多くの庶民の暮らしがたくさんある。そうしたものが少しずつ、少しずつ堆積して歴史になるのだと思う時、没骨法^{もっこつぼう}で幾重にも描き足されたような、明確な輪郭も境界線も曖昧な世界から、誰かの手の痕跡や想い、生活の軌跡を掬い上げてみたくなるのだ。

写真作品の制作過程の見えなさ(それも含めて写真作品ではあるが)について悩むことがある。私の作品において、撮影という行為は制作の3分の1を占めるくらいで、残りはリサーチやフィールドワーク、プリント作業なのだが、写真展となるとどうしても画が前面に出て、背後にある制作そのものが隠されてしまうように思う。今回2ヶ月の滞在期間中、常時スタジオを使わせていただけるということで、制作過程を可視化し、私の思考や行動の軌跡を追えるようにしたいと考えた。展覧会と制作過程を2ヶ所の会場に分けることで、アーティスト・イン・レジデンスという少し特異な制作環境だからこそできる形態を目指した。

タイトル「綿々とはたづみ」について

現在に連なる日本国のはじまりの地でもある大和という土地を歩いていると、澄んだものやよきものだけが渾々と湧き出で続けてきたというよりも、生にまつわる卑俗なものや厭わしいことをすべて包含して、古代から綿々と続いてきた人の営みに触れている気がする。文明がはじまるずっと前に水を湛えていたというこの盆地で交錯し、積もり積もってきた人の生活のにはたづみ、そういうものが足元に存在していることを想う。

※にはたづみ【潦、行潦】雨が降って地上にたまり流れる水。
「ながる」、「すまぬ」、「行方しらぬ」にかかる枕詞。(広辞苑)

会場 **Art-Space TARN**

会期 **2024年11月16日～11月27日**

———生と死について

私の作品に関して、「生と死」という言葉が他者の口から出る時、違和感を覚えることが時々ある。おそらく、その「生と死」に、私が現在考えていることとは少し異なる意味合いが含まれていると感じられるからだろう。私にとっての「生と死」は、二項対立的なものではなく、均質に近いものである。以前、古墳を被写体に作品制作をしていたときに考えていた、生と死は本来均衡を保っており、古墳は黄泉平坂ともいえる生と死を繋ぐ場であるという感覚からきている。また、私にとって墓は死の領域にはなく、生の領域にある。それは、墓の存在が生者にとって意味を持つ場、死者と触れあい、死者に思いを馳せる場であるということが大きい。(自分の)死がなぜ恐ろしいのかというと、決して経験することのできない(ように思われる)未知の領域だからであり、近しい他者の死になぜ怯えるかということ、その人ともう二度と会うことができないからではないだろうか。

今回の制作期間中、死を感じる事象に度々遭遇した(上記のようなことを考えていたために、そう感じたのかも)。上ツ道の上に、

点々と押し潰されていた蛙。蟻螂や蛇の死骸もよく目にした。溜池の茂みに隠れていた亀には虫が集り、甲羅がほとんど残っていなかった。ダム下に倒れていた2頭の鹿は、顔の一部が白骨化しはじめていた。ぱきりと足の下で音を立てる小さな蝸牛。羅列すると不快感を覚えるかもしれないが、私たちの日常には死がありふれている。単に気づいていないだけか、視界に入っているにも気にしないだけなのか。動物に限らず、植物に関しても目に留まることもある。ただ人間の生活を基準に、ある種、命の選別が日常茶飯に行われている。善悪ではなく、それが、人間が生きるということであり、生活していくには仕方のないことでもあるが、時々ふと、その無頓着さと都合の良さを考えながら歩くこともあった。市街地ではまるで葛の群生地のように、人間の生活のエネルギーはあらゆる死を覆い隠し、着々と先へ進んでいく。この世界は死で溢れているけれど、それは生が溢れているからということなのかもしれない。

———ふるきよきもの

滞在中、ある人がいった、「古き良きものがどんどん失われていく、無碍にされている」というような言葉がずっとひっかかっけていて、折々に思い出していた。その後、別のところでも「最近の人は寺社を大事にしない」という会話を耳に挟んだ。ある意味で、その通りなのだと思うし、なんとなく「古き良きもの」に関する共通認識のようなものがあるような気はするが、実際のところ「ふるきよきもの」とはどのようなものなのだろうか。古いから良いということは決してなく、古くて悪しきものも沢山ある。風景に関していえば、戦後の発展の中で失われ続けてきた沢山のものは、不便だったから、不要になったから、ということの結果ではないのだろうか。原風景といわれるものは、現在私たちの日常を取り巻くあらゆる機器と、技術革新以前の生活が基盤になっている。つまり、自分の足で移動するということとも密接に結びついており、農作業にしても、家の景観にしても、現代社会の感覚では利便性に欠ける生活によって成り立っていたために、時代が進むにつれてそれらが失われたことは当然ともいえる。古墳にしても、文化財や陵墓として古墳を大切に

保護する一方、幹線道路の開通や宅地造成など、開発のためには切断し、破壊することも厭わない。その矛盾や欺瞞を飲み込んでなお、失われつつある過去への郷愁や愛着を超えた、「ふるきよきもの」をどのように保存し、利用していくべきなのだろうか。昨年から私が関心を寄せている、「遺産」の思想にも通じるものがある。経済効率の悪い不要なものとして打捨てるままにするのではなく、文明の変遷の証拠となるものとして保存すること。それが、新しい文化の礎となり参照され得るものとして、アイデンティティの一部となる可能性を残すこと。いつでも、巻向駅まきむくの盛り土から、古墳の面影を探せるといい。

私自身、山間部や農村の暮らしに憧れ、土の濃い匂いとともにありたいと思いつけていたり、昔ながらの手作業で作られる民芸品を好み、紙の媒体に執着したりもする。経済効率と維持することの労力など、思考は尽きないが、今、それらへの考えを止めると、あっという間に消滅してしまうだろう。

——道と歩くことについて

知らない土地を知るために、何ができるだろうか。レジデンスに行く時、私はまず地形図を用意する。地名にはじまり、宅地、田畑、森林、川、道路など、その地域の距離感や位置関係をざっと把握する。今回は特に地名の気になるところが多かった。読めない地名が多いということは、おそらくその音がずっと使われ続けてきたであろうことが想像され、古い土地に行くのだということを実感した。その土地に到着した後は、とにかく歩く。昨今、田舎に行けば行くほど歩く機会が減るようだが、その土地のことを知るには自分の足で行ける範囲を歩くしかない。どのような風土を背景に、どんな家、暮らしがあるのか、植生や開墾の状況を観察しながら、五感でその土地を知覚する。文献や資料で得た情報から、かつて歩いた人々のことや、景観を想像し、いま現在進行している生活に触れながら写真を撮る。

「わたしたちの精神も肉体の足取りと同様、時速3マイルで動いているのではないかと思っている」と、レベッカ・ソルニットは書いている*。思考の速度ということでは、紙の本を読む、ということも

思考の速度なのだと思うことがあった。天理市内のあるカフェで、半世紀ほど前に刊行されたヘッセの文庫本を手にする機会があった。その文字のあまりの小ささに嬉しくなってしまった。古い文庫本だと上下二段になっているものもあり、そういう本は遅々としてページが進まない。その、ページを捲る速度もやはり思考の速度なのかもしれない。スマホの画面をスクロールしても、大して思考は働いていないのではないかと思う。ざっと調べ物をする分には便利だが、そうやって調べたことはすぐに忘れてしまう一方で、何年も読み切ることのできないプルーストの小説から得た感覚は、折に触れて思い出したりする。写真も同じで、じっくり観察しながら、ファインダーを覗き続けて、その場の感覚に深く触れようとしながら撮った写真のことを忘れることはない。そういった、見ることに接続する他の感覚や思考を携えて、歩いている。この感覚を知っている、ということから別の記憶を手繰り寄せたり、道端のちょっとしたものから想像をはじめたり(想像だけれど、自分の持っている知識を総動員して、おそらくそうであるという結論をくだす)、そうやって

世界を押し広げていく。

道は何を繋いでいるのだろうか。もちろん多くの場合、出発地点と目的地を結ぶのだが、出発地点がもうどこか分からないほどに遠く、目的地も曖昧な場合、或いはただ歩くことが目的でもある場合はどうなのだろうか。足元に何があるのか、身近な土地のことを見過ごして、いったい世界の何を知るのだろうか。

※ レベッカ・ソルニット『ウォークス 歩くことの本質』、東辻賢治郎訳、左右社、2017年、22ページ













会場 **なら歴史芸術文化村**
芸術文化体験棟3F スタジオ302

会期 **2024年11月16日～11月27日**





PROSEDUR PENYIARAN
PERALATAN PENYIARAN

1. Menentukan lokasi siaran
 2. Menentukan waktu siaran
 3. Menentukan jenis siaran
 4. Menentukan jenis alat siaran
 5. Menentukan jenis tenaga siaran
 6. Menentukan jenis saluran siaran
 7. Menentukan jenis penerima siaran
 8. Menentukan jenis pemancar siaran
 9. Menentukan jenis antena siaran
 10. Menentukan jenis pemroses siaran

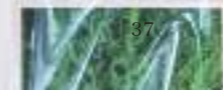


PROSEDUR PENYIARAN
PERALATAN PENYIARAN

1. Menentukan lokasi siaran
 2. Menentukan waktu siaran
 3. Menentukan jenis siaran
 4. Menentukan jenis alat siaran
 5. Menentukan jenis tenaga siaran
 6. Menentukan jenis saluran siaran
 7. Menentukan jenis penerima siaran
 8. Menentukan jenis pemancar siaran
 9. Menentukan jenis antena siaran
 10. Menentukan jenis pemroses siaran

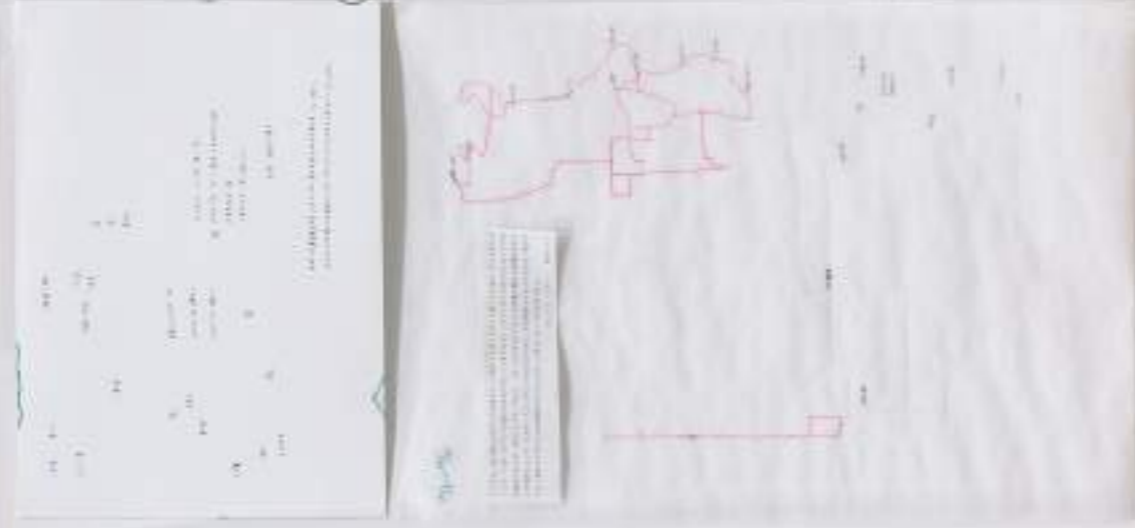
PROSEDUR PENYIARAN
PERALATAN PENYIARAN

1. Menentukan lokasi siaran
 2. Menentukan waktu siaran
 3. Menentukan jenis siaran
 4. Menentukan jenis alat siaran
 5. Menentukan jenis tenaga siaran
 6. Menentukan jenis saluran siaran
 7. Menentukan jenis penerima siaran
 8. Menentukan jenis pemancar siaran
 9. Menentukan jenis antena siaran
 10. Menentukan jenis pemroses siaran





Handwritten note in the top-left photo slot.



Handwritten note in the middle-right photo slot.



Vertical text strip on the far right edge of the page.



Судя по карте, в этом районе
 находится место, где
 в 1917 г. был основан пос. Заря
 (ныне пос. Заря)

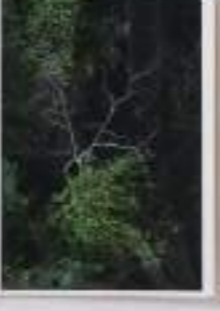
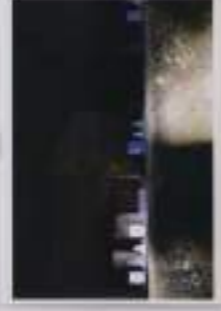


В 1917 году в этом районе
 был основан пос. Заря
 (ныне пос. Заря)

В 1917 году в этом районе
 был основан пос. Заря
 (ныне пос. Заря)

В 1917 году в этом районе
 был основан пос. Заря
 (ныне пос. Заря)





42

43





図4 日本列島の地理的特徴

日本列島の地理的特徴は、地形、気候、資源、人口、産業など多岐にわたります。以下に主要な特徴を解説します。

地形
 日本列島は、太平洋の西側に位置し、東に太平洋、西に中国海、南に東シナ海に囲まれています。地形は、山岳地帯が主体で、国土の約70%が山地と山地に覆われています。主要な山脈には、北に延びる日本アルプス、中央に走る中央山脈、南に延びる西日本山地があります。また、日本列島は、プレートテクトニクスによる火山帯であり、活火山が約230ほど存在しています。

気候
 気候は、緯度、地形、海洋の影響によって地域ごとに大きく異なります。北海道は冷帯気候、本州北部は温帯気候、本州中部から九州北部までは温暖な気候、九州南部は亜熱帯気候に属します。また、日本列島は、季節風の影響を強く受けており、梅雨や台風などの気象現象が頻りに発生します。

資源
 日本列島は、天然資源が乏しい島国です。主要な資源として、森林資源、水資源、地熱資源、海洋資源があります。また、日本列島は、工業原料の多くを海外から輸入しています。

人口
 日本列島の人口は、約1億2,500万人と推定されています。人口は、戦後急激に増加し、現在は高齢化が進んでいます。人口密度は、関東平野、濃尾平野、近畿平野、四国平野などの主要な平野に集中しています。

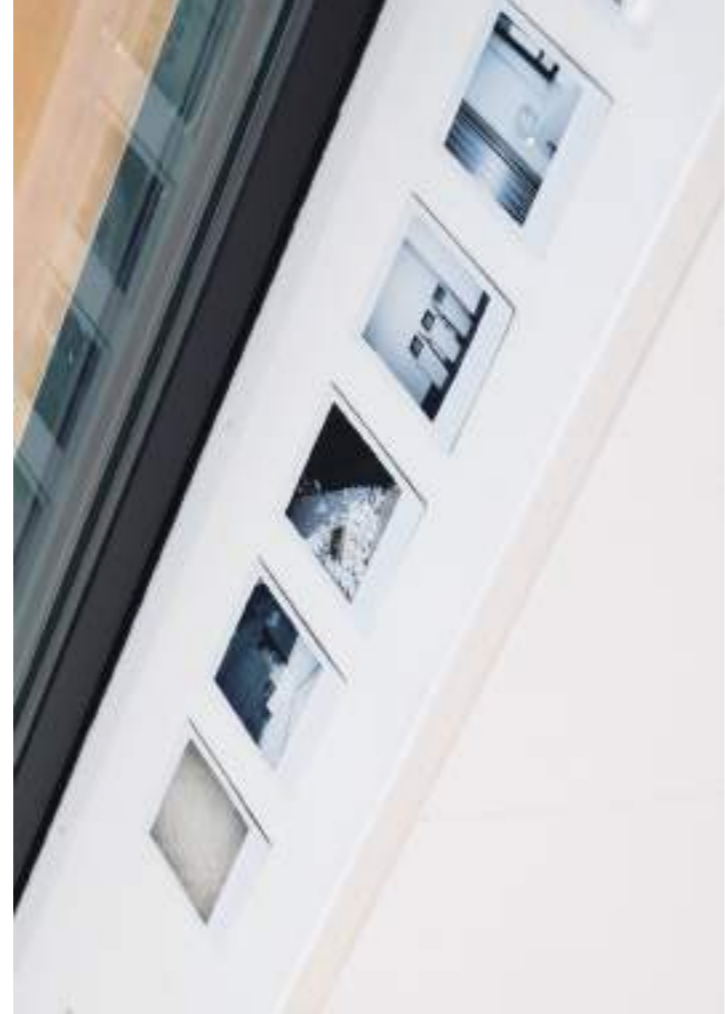
産業
 日本列島の産業は、戦後高度経済成長を遂げ、先進国として知られるようになりました。主要な産業として、自動車産業、電子産業、機械産業、化学産業、繊維産業、食品産業があります。また、観光業も重要な産業の一つとして成長しています。

交通
 日本列島の交通は、高度に発達しています。国土交通省が中心となり、鉄道、道路、航空、海上交通が整備されています。特に、新幹線による高速鉄道網の構築は、日本の交通の発展に大きく貢献しています。

文化
 日本列島の文化は、独自の伝統文化と現代文化が共存しています。和食、着物、祭り、茶道、花道など、伝統文化は世界的に知られています。また、アニメ、マンガ、ゲームなど、現代文化も世界的に人気があります。

環境
 日本列島の環境は、自然環境と人工環境が共存しています。自然環境は、森林資源、水資源、地熱資源、海洋資源が豊富です。人工環境は、高度な技術と設備が導入されています。また、環境問題への対応も進んでいます。

国際関係
 日本列島の国際関係は、平和主義を掲げ、国際協調を重視しています。G7、G20、ASEAN、APECなどの国際機関に加盟しています。また、経済協力開発機構（OECD）のメンバー国としても知られています。



『その風景を成立させている土地の履歴や出来事、風土や人の営みを有する「場所」として土地を捉え、普段見落とされがちなことや、焦点が当たりにくいことについて制作を展開している。』として、取材地へのリサーチやフィールドワークをベースに写真として切り取る大槻の作品を見る・読むにあたり、奈良の歴史や風土に詳しい歴史学者で天理大学准教授の黒岩康博氏にご協力を仰いだ。

本稿は、展覧会の終了からおおよそ1ヶ月後となる2024年12月25日、黒岩氏が展示作品から前もって選んだ3枚の写真をもとに、その撮影地の情報を頼りにそれぞれの場所を訪れ、そこが歴史的にどのような場所であったのか、そこで何が見えるのか、大槻がなぜその場所を撮影したのかなどについて、異なる視点で考察・想像してみようという試みであり、黒岩氏の視点から寄稿いただいた。



公私混濁 —まぜるな危険?—

黒岩康博

もう随分昔のように思えるが、筆者は2017年に「好古の瘴気—近代奈良の蒐集家と郷土研究」(慶應義塾大学出版会)という著書を上梓している。「近代奈良に充満する「好古の瘴気」に中てられた郷土研究者たちの、時に常識はずれで不道徳にすら見える興味深い営為」(同会HP)を追った一冊である。昨年10月末、知人を介して本記録集の件を依頼された際、「黒岩さんのお仕事やこれまででの活動などを含め、作家の大槻さんもとても興味を持たれていて」というメールの文面を見て、「ああ、大槻氏も毒気(ノスタルジア)にやられたか」と早合点した。その後11月に入り、なら歴史芸術文化村で大槻さんにお会いして制作中の作品を拝見し、上記の如く短絡な話ではなく、関西の前方後円墳を撮影した「傾がずの原 Barrow of Equilibrium」(2012-14)や原生林としての青木ヶ原樹海を捉えた「泉の果て End of Spring」(2020-22)といった過去の作品から繋がる、「死から生を捉え直す」というコンセプトに沿ったものになるようだとということが予測された。

実際に天理本通り商店街のArt-Space TARNにて成果発表展「綿々とはたづみ」を観覧することが出来たのは、11月21日のことである。同日TARN隣の商店街事務所「にぎわいプラザ」では、「天理本通りヒストリア」と題する所謂「思い出の写真展」が開催されており、筆者もフラフラと引き寄せられてそちらを先に観覧した。周辺住民から提供された懐かしの街頭風景写真を眺めながら、桜井・天理という地域に根ざした大槻さんの写真も、地元の人間がノスタル

ジアに浸るためのメディアとして消費されてしまうのだろうかとの危惧が芽生えた。しかし、これは全くの杞憂であった。二階堂の下ツ道や豊田の天理教おやさとやかたのように比較的判別し易い被写体もあったが、恐らく在住者でも比定が難しいアノニマス(無名)な場所の写真も多く、地蔵や勸請繩といった信仰物・呪物にフォーカスした写真も目を惹いた。

なら歴史芸術文化村・Art-space TARNで全ての作品を鑑賞した後、私の脳裡に浮かんだのは、生と死のあわい、つまり会場のパネルにも記されていた「死から生を捉え直す」という大槻さんの制作コンセプトに加えて、「公と私」の微妙な境界線であった。こういった漠然たる所感を言葉に紡ぐべく、12月25日、Gallery PARCの正木裕介さんたちにご同行頂いて、大槻作品を手に現地を訪問してみることにした。大槻さんも土地への綿密なりサーチを経てシャッターを切るスタイルの作家のようであるが、私も会場で写真を見た際は異なり、歴史学者らしく事前にとこたまま知識や情報を仕込んでおくことにする。選んだのは3枚、つまり訪れた場所に、①果樹のある古墳(西山塚古墳)、②山辺の道海柘榴市付近、③福住町別所の埋め墓、の3箇所である。



①果樹のある古墳(西山塚古墳)



②山辺の道海柘榴市付近



③福住町別所の埋め墓

① 果樹のある古墳(西山塚古墳)

天理市董生町



そまのうち 勤務地が畑之内・柳本らの古墳群に囲まれ、キャンパスにも西山古墳。数多の墳丘を眺めつつ日々通勤していて感覚がマヒしている私が言うのもどうかと思うのだが、こうした「実用化」された古墳は、奈良盆地ではよく見かける光景である。そもそも、天皇・皇族の墳墓である陵墓ですら、多くは元禄期(1688-1704)以降数度の修補によって現在のかたちとなったのであり、草・薪・瀑水を村民が共同利用する入会地であることも珍しくなかった。副葬品や内部構造の詳細、延いては被葬者も判明していない西山塚古墳のような墳墓ならなおのこと、こうした土地利用が江戸時代から続いていても、何も不思議ではない。

今回写真を手に果樹を横切り、丘の上に立って同行諸氏と西方を遠望して

も、湧いてくるのは「完全に脱色された死」「生きられた風景」といった思念ばかり。それを変えたのは、同行した写真家の麥生田兵吾さんがその場で撮ってくれた、大槻写真よりも少し引いた墳丘写真だった。そこに写っていたのは、まざれもない墓＝死だったのである。埋葬時にはパノナルなものであった古墳が、風化とともに入会地として公共利用され、また私的なものへと戻る（現在古墳の麓には宿）という公私のゆらぎのみを感じていた私に、大槻さんも撮り、焼き、眺めることによって抜きがたい死の匂いに気付いたのでは、という可能性をその一枚は示してくれた。前述拙著の裏テーマは、唾棄すべき現場至上主義を駆逐することであったが、ファインダー越しのままざしの方が、地霊を捉えることがあると、図らずも①は教えてくれたのである。



② 山辺の道海柘榴市付近

桜井市金屋



『万葉集』の「海石榴市の八十の衢に立ち平し結びし紐を解かまく惜しも」(巻12-2951)により、古代に歌垣が催された場所として著名な海柘榴市は、大和川を遡航した舟運が陸路と接触するところでもあり、商人や里人が行き交う交易の巷でもあった。海柘榴市のある桜井市金屋は、現在東海自然歩道を兼ねる山辺の道の南端となっているが、山口敬太によると同道に対するハイキングコースや「歴史の道」という認識が一般に普及するのは、昭和戦前期のことだという(「近代における奈良・山辺の道の形成とその背景」『ランドスケープ研究(オンライン論文集)』6,2013)。今や古の殷賑を感じさせる人車の輻湊はなく、古道と言うには由緒の不確かなこの道のほとりの何に、大槻さんは惹かれたの

だろうか。後日展覧会フライヤーに「古代の人々が、時に日本海を越え大和川を
廻り、閉じられた地形でありながら外界に開かれたこの地に来ていたということ
にも強く惹かれる」とあるのを見つけ、この一枚を写した動機については理解出
来たのだが、私が興味を持ったのは、やはり現在のこの空間における公私の混
淆であった。

現地を訪れた我々を迎えてくれたのは、②にもあった季節の花々であった。花
壇は大和川の左岸(南側)にあり、右岸(北側)は日当たりの面では優れているに
もかわらず、建物の位置が堤防より一段低い上に、給食センター・医療セン
ターという施設が集まっているためか、対面のような花園の形成は見受けられ
なかった。②をTARNで観て私が想起したのは、桂川を渡る車窓から見える河
川敷の耕作地である。丁度花の手入れをしていた女性に話を伺ったが、既に園
芸歴は40年近く、道路前の各家が思い思いに手掛けているのだという。右端に
写るサツキの植え込みは自治体が設置したらしいので、公共の土地であること
は明らかだが、近くに作られた蜂の巣の駆除を市に依頼しても、何ら報告はない
らしい。交易の喧騒を主とする道の生命は、一本隣の県道105号に譲っている
この地ではあるが、色とりどりの花たちがハイカーたちをノスタルジーから現在

に引き戻す。



③ 福住町別所の埋め墓

天理市福住町



最後は文化村でも、TARNでも最も鮮烈な印象を受けた一枚である。一般の
観覧者もそうだったのではないだろうか。少し青みがかった薄暗い写真の表面
から滲み出る、土俗という名の湿気。瘴気を伴い満ち満ちる死の影。月ヶ瀬、宇
陀など奈良県東部の山間地方には両墓制が根強く残っていたことは知っていた
が、県内出身の学生に授業で問い質しても、だいたいは火葬に切り替わってお
り、このような土葬の雰囲気は強く残す場所は、恥ずかしながら見たことがな
かった。我々の車が天理ダムを過ぎ、バラモン杉の立つ下之坊に着いて詣り墓
(石塔墓)を探る間も、期待は高まる一方であった。

下之坊から山へ入り、墓域の入り口にある建長五年(1253)在銘の受け取り

地蔵を拜んでから埋め墓の方を振り返ると、そこには驚愕の光景があった。何とも明るいのである。直上を木に覆われない墓域は光にあふれ、乾燥した時期に訪れたということもあるが、土の臭いや湿気はほとんど感じなかった。朽ちる墓標、均される土饅頭の如く、トボスの終焉＝死を思わせる要素はあるものの、掃除の跡や花立ての新しい仏花とお供え、最新の元号が入った木標などは、いまだ弔いの場所として機能していることを訴えかけて来る。風習・制度としての土葬は失われたかも知れないが、埋め墓は明らかに生きた場所だったのである。

山を出、付近で野焼きをしていた地元の男性に話を伺ったが、やはり土葬は火葬へと替わっていた。彼は、「死者があれば、カイトの者が死者の年齢に応じた場所を選定し、多くは古いス(墓)を掘りおこして埋葬する」(449頁)という『改訂天理市史』下巻(1976)の記述同様、埋め墓が共有地である旨を語った。しかし、複数の家族を同じ場所に埋めたことを窺わせるような塔婆があったことや、詣り墓が建立されたであろう後も朽ちた木標にお供えをすることがこの墓地の私有化ではないなら、一体何と考えられるのであろう。世帯数の減少により生じた事態かも知れないが、ここにも公私のあわいはあったのである。



もう一箇所、上仁興公民館にも立ち寄ることが出来たのだが、日没後で暗くて撮影に不向きだったことと、周辺に聞き取りが可能な住民を見つけれなかったこともあり、大槻写真の現地読解は断念した。この公民館は、写真ではよくある元小学校の建物だろうと予測していたのだが、廃寺となった釈尊寺という寺院であつたらしい。上仁興の学齢児童は、1966年の統廃合により平地の山の辺小学校(天理市別所町)に通っており、同地では公共空間としての学校の存在感が非常に稀薄である。ただハコとしての公があっても、ヒトという私かなければ地域は活性化されない。公と私の混ざり合いこそが、我々の世界を駆動させてゆくのだ。

帰途ハンドルを握りながら、私に写真の何が分かるのか、と大それたことをしてしまった後悔に頭を抱えたが、誤読も恐れず大槻写真を読み解いてみた。このような無鉄砲なプランにご同行頂き、現場での考察をサポートして下さった、正木さん、麥生田さん、デザイナーの安間仁美さん、文化村の北村良子さんには感謝申し上げます。ありがとうございました。



黒岩康博

1974年京都市左京区生まれ。天理大学人文学部准教授。専門は日本近現代の文化史・娯楽史。写真の分析については、主著「好古の瘴氣―近代奈良の蒐集家と郷土研究」(慶應義塾大学出版会、2017年)や植田憲司ほか編『増補新版 戦後京都の「色」はアメリカにあつた!』(小ざ子社、2023年)において、ヴァナキュラーなものを素材に行つたことはあるが、作家の芸術写真を扱うのは恐らく初めて、継続して取り組んでいる研究テーマには、神話と郷土史、スポーツの普及過程、地方博覧会と地域文化・経済などがある。

滞在記録

滞在期間中、大槻さんは、制作に向けた天理市・桜井市の歴史や文化のリサーチ、地域の人々との交流などを行いました。

ここでは文化村職員の視点から、滞在の様子をレポートします。

地域めぐり

今年度から、制作の事前準備として桜井市での滞在(宿泊)と天理市・桜井市の地域案内を実施しました。桜井市の宿泊施設のオーナーは、関東から奈良に移住された方で、同じく関東から来た大槻さんに桜井の魅力やおすすめの場所などを教えてくださいました。また、地域案内では、ボランティアガイドや市職員が、大槻さんの関心や制作プランにあった場所を案内しました。山辺の道のほか、訪れる人の少ない山間部など、地域の暮らしや習俗を感じることができる場所を歩き、作品の構想を広げていきました。制作の中で、歩くことを大切にしている大槻さんの健脚ぶりには驚かされました。



天理市長・桜井市長表敬訪問

毎年、滞在アーティストは、天理市長と桜井市長へ表敬訪問を行っています。天理市長からは、大槻さんが山間部に興味があるとのことから、立体地図をもとに地形を説明していただきました。桜井市長からは、市役所のテラスから見える市内の山々について説明いただくなど話が弾みました。



文化村AIR×Time Travel プロジェクト

「Time Travel プロジェクト」は天理の魅力を発信するプロジェクトで、市内小中学生から天理の魅力をまとめた作品を募集しています。参加した子どもたちとアーティストの交流により、応募作品を通して天理について話をする場を持ち、インスタントカメラを使ったワークショップも行いました。また、文化村周辺を散策するウォーキングイベント「Time Travel Walk」には大槻さんも小中学生と参加し、「天理市山の辺の道ボランティアガイド」の方々や天理大学の学生とともに約5kmの道のりを歩きました。途中、餅つき体験などにも参加し地域の人々との交流を楽しみました。



天理大学 柿収穫体験

天理大学は、農業の担い手育成や地域特産の柿とねわせ「刀根早生」の生産振興に向け、2024年7月に農業生産法人「天理アグリ」を設立しました。環境に配慮した生産や加工、流通を見据えた事業を展開し、高齢化が進む地域農業の再生を目指しています。滞在期間中に収穫時期を迎えることから、収穫体験をさせていただきました。大槻さんは収穫した柿をスタジオで干し柿にしていました。



奈良県立桜井高等学校訪問・相談会

大槻さんは、高校生の頃、芸術系大学への進学を希望するも、周囲に相談できる人がおらず悩んだ経験があるそうです。滞在中、高校生で芸術系大学への進学を考えている生徒がいれば話をしてみたいという大槻さんの希望から、奈良県立桜井高等学校訪問と相談会が実現しました。芸術系大学出身の文化村職員も加わり、自身の経験談や知人の進路事例などについて話しました。生徒たちは真剣な表情で話に耳を傾け、将来に向けてヒントを得ている様子でした。



桜井市立初瀬小学校でのワークショップ

大槻さんは、応募段階から地域学習に取り組んでいる学校との連携を強く希望されていました。そこで地域学習に力を入れている桜井市立初瀬小学校でワークショップを実施しました。6年生を対象に「学校で自分が好きな場所」をインスタントカメラで撮影するもので、撮影チャンスは2回。卒業を控えた6年生が、学校での思い出を考え、心に残る好きな場所を撮影しました。そこには様々な思い出や本人にしかわからない場所が写し出されていました。手軽に写真撮影が可能となった現代において、他者からの評価ではなく、自分が何を表現したいのかを考えて撮ることを大切にしてほしいという大槻さんのメッセージを伝えることができたのではないのでしょうか。



スタジオでの付箋のやりとり

滞在期間中、大槻さんへの質問や大槻さんに伝えたい周辺地域の情報を募集しました。スタジオのガラス窓に付箋を貼っていただき、それに対して大槻さんが応じるというもので、そのやりとりは文化村のInstagramでも公開しました。ここでは一部のやりとりをご紹介します。



Q. 写真は記録としての意味が大きいと思っています。写真に撮る事で記憶は薄れて「物」になってゆくと感じています。大槻さんの作品には記憶があると思いますが、写真にとっての記録と記憶はどのようなものだとお考えですか？

A. 私の場合カメラで撮るものはあまり記憶が薄れません。今回はデジタルメインですが、ずっとフィルムを使っているものもあるのか、対象をじっくり見て、1枚か2枚だけシャッターを押します。心が動くところで撮りたくなるので記憶に留まるのかもしれない。記録として撮る時は、もっと淡々と私の意識がそこまで介入しないように客観的に撮ります。記憶が何年も経て記録になることはあるように思います。

Q. 奈良に滞在してどうですか？奈良っぽいところは何かありますか？

A. 興味が尽きず困っています。ガイドの方がめちゃくちゃ詳しい。説明が分かりやすく、とても上手なところ。古墳時代からの人の営みの累積(?)が可視化されているところ。(特に上ツ道と山辺の道付近)

Q. 「心が動くところで撮りたい」ということですが、大槻さんにとって「心が動く」というのはどのような瞬間ですか？

A. 光の加減、色、彩度、形状に惹かれたり、音や風、匂いだったりします。或いは誰かの(想いの)痕跡という時も多いです。花もよく撮るのですが、それは誰かが、自分の生活を少し豊かにするために手入れをし、大事にしている、ということに心惹かれるのだと思います。

制作について

風景ではなく「場所」を撮ることを制作のコンセプトとしている大槻さんにとって、自らの足で歩くことは、とても重要なことです。気温や湿度、音、匂い、歩く時の足裏の土や草やコンクリートの感覚など、目で視る以外の知覚を通して、その場所を捉え、写真を撮る大槻さん。今回は滞在制作の期間が短いため、デジタルカメラで撮影を行いました。普段は大判カメラも併用されているとのこと。大判カメラでの撮影時も、自らカメラを担いで、歩いて撮影場所まで赴くそうです。



滞在制作を振り返って

2024年10月1日晴れ。午後、大槻さんを迎えに天理駅へ向かうと、早く到着していたらしく駅前の中華料理店で昼食を食べていました。駅前を案内がてら散歩しました。事前にオンラインで打ち合わせしていたこともあり、緊張感はないものの、口数は少なめでありながら、ゆっくりと見るもの、感じるものをよく噛み消化しているようでした。

ある日、桜井市に滞在しているはずの大槻さんが、電動自転車で桜井市の宿から天理市にあるなら歴史芸術文化村（以下、文化村）まで走ってきたことがありました。今回の滞りで山間部に行きたいと話していただけに足腰には自信があるのだろうとは思っていましたが、まだ残暑が続く中だったので、少し驚きました。

文化村のスタジオを拠点として活動が始まると、今まで滞在したアーティストとは少し違う設えになりました。これまでの滞在アーティストの場合、多くは自身の道具や使用する素材で溢れていましたが、大槻さんが使用するスタジオの大きな作業机には、図書館で借りてきた市史や自身が持ってきた数冊の本が並び、中には謡曲集などもありました。周辺地域の案内パンフレットなどは、写真用紙の空き箱に綺麗に取められ、机上には沢山の種類のペンや付箋など整理整頓されて

おり、スタジオに入ると、まるで友達のお姉さんの部屋に来た感じがしました。

制作の中で、天理市や桜井市の歴史や文化のリサーチ、地域の人々との交流も行いました。人に出会い、そこで見聞きしたことを手元のスマートフォンに入力する姿を何度か見るがありました。スタジオに持ち帰って調べごとをしたり、考えたりする作業を通して、日々増えて行く情報に圧倒されました。

言葉を大切にしている大槻さんは、子供たちがワークショップで制作した作品一つひとつにコメントを書いていました。ある時は、文化村に展示している夏休みの自由研究を見て「全部の作品にコメントを書きたい。」とも話していました。また展示会は作家のテキストなどを掲載した配布資料を作成することが多いのですが、「粗雑に扱われることを避けたいので印刷して配布することはない」と言っていたことも印象に残っています。

審査委員による展覧会講評

西尾 美也

美術家／東京藝術大学 准教授

大槻唯我さんの今回の取り組みは、「多くの方々に文化芸術への関心を高めていただくこと」という本事業の目的に適うものでした。

スタジオでの資料展示では、誰もがスマホで簡単に撮影してSNSで発信できる時代に、「写真作品の制作過程の見えなさ」を可視化し、写真家の仕事を知る機会を提供しています。リチャード・ループが『あなたの子どもには自然が足りない』（2006年,早川書房）で指摘したように、このSNS時代は、自然欠乏障害として、子どもの発達にマイナスの影響を及ぼす時代であるとも言えるでしょう。大槻さんはフライヤーの中で、歩くことや見ることについて、「気づき、考え、知り、感じるということが含まれている」と述べています。スタジオでの資料展示は、そのことの大切さを伝える内容になっています。

そして、奈良と写真というキーワードからすぐに思い浮かぶのは古美術や文化財を対象にした写真や観光写真ですが、大槻さんの写真作品はそれらと一線を画すものです。県民にとって新しい発見であるだけでなく、見えているものには見えていないものがあること、かつて同じ道

を歩いた人々の無数の感じ方があること、われわれは場所や対象から何を受け取っているのか、など、芸術の普遍的な問題に鑑賞者を誘っていくものとして機能しています。

大槻さんと同じように土地を知ること、歩くこと、という作業を創作過程に取り入れる若い表現者が増えているように思います。それは上述したような時代に対するアーティストの感性であり抵抗なのでしょう。その意味では、大槻さんとひたすら一緒に歩くようなワークショップがあれば、それ自体が新しい経験の共有になるようにも思いました。

また、Art-Space TARNでの作品展示は、スタジオでの資料展示と対比的で空間に対する取まりもよかつたのですが、画展示を再編集したような画集や、大判プリントでの体感型に近いインスタレーション展示も見てみたいと感じました。今回の取り組みもまたプロセスだと思いますので、今後、奈良で撮られた写真が全く異なる場所で展示されたり、別の場所での経験と繋がったりしながら、大槻さんの、世界を押し広げていくまなざしが人々に広まっていくことを期待しています。

服部 滋樹

graf代表／クリエイティブディレクター

2025年日本国際博覧会協会CDCアドバイザー／京都芸術大学 教授

様々な協業の幅が広がる気配を感じるモノでした。2025年は大阪関西万博の年だということもあり、テーマとなっているCo-Creationが様々なところで行われていく事となる。この地でアーティスト・イン・レジデンスが行われるようになり、市民と共に行う事業も徐々に浸透しつつある。そんなタイミングでの今回の審査では共創という形や過去、現在の可視化を共に作る、そんな可能性に秘めた方々を検討し審査を進めて来ました。

共創には、それぞれの役割をどの様に果たしていくのか？効率性を越えた何か、新たな野に放たれた様な「野性的な状況」を察知するチカラが必要なのだと思っています。まるで発酵菌の様に素材同士が触れ合うことで、その環境でふつつつと共鳴し合うように互いが持つ要素を引き出していく。その環境を感じ役割を果たしていく、そんな共創を期待するのです。時間をかけて紡ぎ出され、今よりも、その先の醸成を夢見つつ、歴史深い奈良の営みと同じように。

松本 耕士

なら歴史芸術文化村 プログラムディレクター

「死から生を捉え直す」

応募用紙に書かれていたこの一文に惹かれ、私は彼女を選んだ。

若い表現者に、天理、桜井の地で何が見えたのだろうか。

生と死の関係性は、人の生き様を大きく変える。

「不安に生きるか、理想に死ぬか」と吉田松陰は語った。

生と死は対極にあるが、「生から死」、「死から生」へと、見る位置、見る方向によって、見えるものは変わってくる。

「生と死は、二項対立ではなく均質に近いもの」という彼女の主張は頷ける。

それを検証するには、古代を感じることができると天理、桜井の地が適していたのだろう。

彼女のリサーチ手法は歩くこと。

歩くことは、全てがスピード化された現代であっても、古代と同じ時間経

過を感じることができる。

時代は移り変わっていくが、歩く速さは変わらない。

そして、時代は現代まで継続しており、それぞれの時代で人は歩いている。

今に伝わる天理・桜井の史跡を歩くことによって、千数百年間にわたり何層にも積み重なってきた何かを、自身の身体で体感したかったのだろう。

写真は表面的なものをリアルに写し出すツールではあるが、意識して制作コンセプトにこだわりを持つことによって、その土地の重層的な歴史をも掘り起こす。

これこそ、大槻氏の表現活動の本質ではないだろうか。

以下、個人的な思い出話

制作スタジオに貼ってあるリサーチ場所の写真やメモが、毎日増えていく。

2ヶ月間にわたり、彼女の着想から表現への過程を見られたことも私の楽しみだった。

「第三世代美術館」という提言がある。

第一世代が宮殿を転用したコレクションの展示空間、第二世代が作品の交換が可能なホワイトキューブ型空間、そして第三世代はその場でしか成立しない体験ができるサイト・スペシフィックな空間。

私は、「完成作品だけでなく、制作過程も合わせて展示する空間」も第三世代美術館の進化型(第四世代美術館?)として存在するのではないかと考えている。

「文化村AIR」、「文化村クリエイション」等々、当施設の芸術文化事業を担当するアートコーディネーターは、「作品の制作過程を共有すること」を大切にしており、今回の滞在制作においても、その意義と成果は十分に伝えることが出来たのではないかと思う。

募集要項

なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業「文化村AIR」

令和4年度(2022年度)より開始したアーティスト・イン・レジデンス事業。奈良県が世界に誇る歴史・芸術・文化を肌で感じ、アーティストの新しい視点や切り口で活動を行い、なら歴史芸術文化村を拠点に制作活動を行う中で、人々が作品とふれ合うことで新しい感性を導き出し、交流することで地域の魅力を歴史や芸術と繋げて広く発信することを目的とする。

《募集要項》

- 招聘期間 [滞在期間] 2024年10月1日(火)～2024年11月30日(土)/61日間
[成果発表期間] 2024年11月16日(土)～2024年11月27日(水)/12日
- 募集期間 2024年6月25日(火)～2024年8月4日(日)
- 結果発表 2024年9月上旬頃
- 主催 なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会(なら歴史芸術文化村・天理大学・天理市・桜井市)
- 招聘人数 1名または1グループ
- 支援内容 制作スタジオ・制作費40万円・往復交通費・宿泊費・記録集／記録映像制作
- 制作場所 なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3Fスタジオ301
- 選考方法 提出された資料をもとに、地域の人々との関わり方や、芸術文化に対して地域の人々が興味を高める内容であるかなど、なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会 会長が委嘱した各審査委員の審査結果を参考に、主催者がアーティストを選考し、決定する。

《受入条件》

- ・現在活動している国内在住のアーティスト(表現者)であること(ジャンル不問)。
- ・18歳以上であること(令和6年4月1日時点)。
- ・地域の人々が芸術文化に関心を持つことができる活動を展開すること。
- ・地域の人々との交流や協働を通じた制作活動を行うこと。
- ・滞在期間中、奈良県の魅力に触れ、フィールドワークを通じて地域の人々との交流を積極的に行い、制作すること。
- ・オリエンテーション期間は桜井市、天理市に滞在(宿泊)し、各地域案内等に参加すること(期間中2日程度を予定)。
- ・天理市地元小中学生等との交流会に参加、桜井市内でのワークショップを最低2回行うこと。
- ・主催者側で編成するワークチーム(地域とアーティストをつなぐ役割を担うサポーター)と、互いに協力しあい、制作活動を行うこと。
- ・制作場所は公開されており、来訪者などが自由に見学できるようになっているため、開かれた環境下で制作を行うこと。
- ・滞在期間中に作品を制作し、主催者と協議の上で成果発表を行うこと。
- ・制作、生活について基本的にアーティスト自身で行うこと。
- ・日本語での意思疎通ができること。
- ・健康状態が良好であること。
- ・滞在前にZoomを利用したオンラインミーティングができること。

《招聘条件》

主催者とアーティストは、以下の条件について、覚書を約定する。招聘条件における主催者からの負担内容は、アーティストが単身で来県することを原則としたもので、基本的に同伴者は不可とし、1グループに対しても単身分の負担内容とする。

[1.来県に関する事項]

旅費

- ・主催者は期間中1回分の往復交通費を支給する。支払い時期は、アーティストが文化村に到着した後とする。上限は100,000円とし、上限を超える交通費はアーティストの負担とする。
- ・原則として、公共交通機関を利用し、居住地の最寄り駅から天理駅間の合理的かつ経済的な経路の鉄道等往復運賃を旅費とする。なお、車を利用する場合は奈良県の旅費規程に準ずる。

[2.制作、成果発表に関する事項]

制作費

- ・主催者は、制作活動に係る費用(調査費、材料費、設営費、撤収費を含む)として400,000円支給する。支払い時期はアーティストが文化村に到着後1週間以内とする。

制作

- ・自身が必要とする機材、工具などは持参すること。
- ・制作現場の清掃は、アーティストの使用範囲内はアーティスト自身が行うこと。
- ・館内のWi-Fiを使用できるが、PC及び周辺機器の貸出しはしない。
- ・その他館内での規則などを守ること(作業可能時間は原則9時～20時、延長の場合は要相談)。

成果発表

- ・アーティストと来場者の交流を大切にしたいため、会期中はできる限り会場対応を行うこと(対応日数は相談に応じる)。
- ・設営や撤収の作業は原則としてアーティスト本人が行うこと(補助的作業については要相談)。
- ・成果発表期間中、メンテナンスが必要な場合は、アーティストが責任を持って行うこと。

- ・主催者は、成果発表に係る用品(キャプション、パネル等)はアーティストと協議の上、用意する。
- ・展覧会用チラシ制作に関しては、文化村のディレクションで制作を行う。
- ・アーティストは原則成果発表終了後、作品を自身で撤去しなければならない。作品を持ち帰る場合の梱包作業及び輸送費はアーティストの自己負担とする。
- ・主催者が記録した写真、映像等の著作権及び公益に資する広報宣伝のためにそれらを使用する権利は主催者に帰属する。主催者及び主催者の了承を受けた者はこれら全てを無償で使用できるものとする。
- ・本事業で制作された作品の著作権と所有権は全てアーティストに帰属する。

[3.取材にかかる指示の遵守]

取材する場所、方法及び事前許可について、主催者から特段の指示がある場合、アーティストは必ずこれに従うこと。

[4.滞在生活に関する事項]

生活

- ・滞在中の生活費は支給しない。

宿泊

- ・宿泊費は6,600円/1泊(最大61泊)を上限として支給する。
- ・下記オリエンテーション期間に関しては、主催者が指定する宿泊施設を利用すること。
桜井市内に宿泊:2024年10月1日(火)～2024年10月6日(日) [6日間]
天理市内に宿泊:2024年10月7日(月)～2024年10月12日(土) [6日間]
- ・その他の期間については主催者が宿泊先を紹介するが、紹介施設以外の施設に宿泊することも可能。天理市内及び桜井市内の複数の宿泊先を紹介し、アーティストが決めることができる(ただし上限額を上回る場合は、アーティストの自己負担とする)。

保険

- ・傷害保険及び、健康保険等はアーティスト自身で加入すること。主催者は保険加入等に関する義務は負わない。
- ・移動手段として、電動自転車の利用(無料)が可能。自転車保険の加入は主催者側で行う。

[5.その他]

活動記録

- ・主催者は本事業の記録のため、記録集を作成する。
- ・主催者はアーティストの作品及び活動の記録を写真、映像で記録するため、アーティストは協力すること。なお、作成した記録集はアーティストにも提供できるものとする(上限100部)。
- ・動画編集、記録集制作に関してのディレクションは文化村とする。

マスコミ対応

- ・アーティストはマスコミ各社からの取材申し込みがある場合、可能な限り協力すること。制作に支障をきたしたり、プライバシーを侵害されたりする恐れがある場合は主催者に申し出、取材を断ることができる。

ワークチーム(サポーター)について

- ・滞在期間中はワークチームが、リサーチの手伝いや、地域とアーティストをつなぐ役割を担う。地域との取組みについては、アーティストとワークチームで検討し、活動すること。その他のサポート内容については、主催者と協議の上決定する。

自然災害、不可抗力等による対応について

- ・状況により、本事業の実施や継続が困難であると判断された場合、主催者とアーティストが状況に応じて協議し、その対応について決定する。

アーティスト プロフィール

大槻 唯我

1990年兵庫県生まれ。現在は東京と神戸を拠点に制作活動を行なっている。被写体となる土地の詳細なリサーチとフィールドワークに基づいた写真作品を制作している。主なコンセプトは、「死から生を捉え直す」、「風景ではなく場所を撮る」、「思考する隙間を提供する」。現代における絶対的な価値を持つ生ではなく、死と生の連関や循環の一部として再考する。また、単に視覚情報として成立する表層的な画面ではなく、風景の背後にあるもの—その風景を成立させている土地の履歴や出来事、風土や人の営みを有する「場所」として土地を捉え、普段見落とされがちなことや、焦点が当たりにくいことについて制作を展開している。最近では、現代の自然との関わりや過疎の進む地方の行方についてのリサーチを兼ね、国内外のレジデンスに参加し、活動の場を広げている。



photo : Lin Shihyen

- 2021年 グループ展「『風景』のつくりかた」(目黒区美術館区民ギャラリー、東京)*アーツカウンシル東京スタートアップ助成
- 2022年 「ファンダメンタルズ」参加(東京大学駒場博物館など、東京)*科学者とアーティストの共同プロジェクトによる展示
- 2023年 「ZEN AIR」(永平寺町、福井)*旧永平寺保健センター及び大本山永平寺傘松閣にて成果展を開催
- 2023-24年 「Katsurao AIR」(葛尾村、福島)
- 2024年 グループ展「ひかりをむすんで」(渋谷ヒカリエ8階 8/CUBE 1,2,3、東京)

なら歴史芸術文化村について

なら歴史芸術文化村は、歴史、芸術、食と農など奈良県の誇る文化に触れることができる施設です。日本で初めてとなる文化財4分野(仏像等彫刻、絵画・書跡等、歴史的建造物、考古遺物)の修理作業現場の公開や、国内外から招いたアーティストとの交流、幼児向けアートプログラムなどを実施しています。

単に見学する、一方向の解説を聞くことだけで終わらず、専門家や他の参加者と対話しながら知的好奇心を広げて学びを深めるラーニングプログラムを実践。五感で感じ、様々な人と関わり、体験して、「なぜ?」という新たな問いを生み出すことを大切に、知を探索していく楽しさを提供していきます。



photo : 衣笠名津美



なら歴史芸術文化村

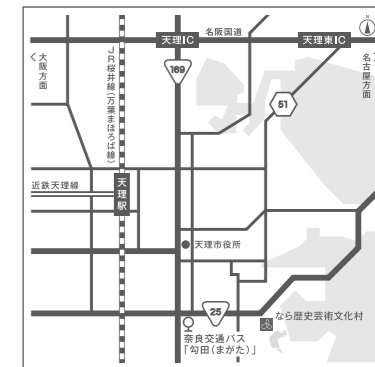
<https://www3.pref.nara.jp/bunkamura/>
〒632-0032 奈良県天理市柵之内町437-3

開館時間 | 9:00-17:00

交流にぎわい棟 9:00-18:00(月曜営業・レストランは20:00まで)

休館日 | 月曜日(祝日の場合は翌平日が休館)

- アクセス | ● JR・近鉄天理駅より直通バス、直通デマンドシャトル運行(有料)
● 奈良交通バス「勾田」下車 徒歩15分 ● 無料駐車場あり



なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業「文化村AIR」
ドキュメント2024

Bunkamura AIR Document 2024

企画・編集 高坂玲子／正木裕介(Gallery PARC)、北村良子(なら歴史芸術文化村)

執筆 大槻唯我、黒岩康博、佐藤守弘、なら歴史芸術文化村

撮影 麥生田兵吾(合同会社ウミアック) [p20-31,p34-49,p52-61,p66,p68]

デザイン 安間仁美／刀根彰吾(mondo)

印刷・製本 株式会社明新社

発行 なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会

発行日 2025年3月

©2025 なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会
無断転載・複製禁止